
猛犬バスカヴィル

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猛犬バスカヴィル

【Nコード】

N0055J

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

鬼火の群れを引き連れて巨大な洋犬が人を襲う！「バスカヴィル」と名付けられ恐れられる犬が襲うのは悪質なペット業者や飼い主。群れで襲う強敵に、立ち向かう紅倉の切り札は新しい相棒。《霊能力者紅倉美姫シリーズ21》

01 紅倉の苦手なもの

*登場人物

紅倉美姫（べにくらみき）・・・最強の霊能力者

芙蓉美貴（ふようみき）・・・紅倉のパートナー。借家に紅倉と住んでいる

紅倉がこの世でもっとも苦手なのが犬だった。

紅倉は犬が怖くて仕方ない。

犬は吠える。もともと吠える動物だけれど、

紅倉に対しては特別に吠える。

犬にとって紅倉は敵なのだ。何故なら、

彼らは幽霊が見えるから。

幽霊は人に害をなす悪いものだから、

紅倉は悪いもの、

敵なのだ。

つまり犬には紅倉が幽霊に見えているわけだ。

吠えられる紅倉はたまったものじゃない。

紅倉は別に犬に敵意も悪意も持っていない。ただ吠えられて怖いだけだ。

嫌いという積極的な意識を持つ以前に、とにかく苦手だ。

8月の暑い日だった。

お昼を食べると紅倉は、パートナーの芙蓉が所用で出かけた隙に、散歩に出かけた。何故かこの頃紅倉は一人歩きをしたがった。小さな子がお母さんの手を振りきって一人で歩きたがるようなものである。

紅倉は視力がものすごく悪い。ふつうの視力の人がマンガに出てくる金魚鉢の底のような分厚いメガネをかけているようなものだ。じゃあ紅倉が金魚鉢の底のようなメガネをかけてまともに見えるかというところはいかないのだが。

いつもの散歩コースからちよつと冒険心を出して先へ進んだ紅倉は、そこで犬に吠えられた。

キャンキャンキャン、と、人気絶好調のかわいらしいチワワだが、紅倉はひひひひと総毛立ち、恐れおののき、キャンキャン鳴く恐ろしい動物から逃げて路地に入った。

ろくに目も見えず、方向音痴の紅倉のことだから、当然迷子になった。こっちなかなー？と歩けば歩くほど泥沼の迷路地獄にはまっていた。

内心えゝんえゝんと泣きべそをかきながら、一応大人のプライドで平気だもん！という顔をして歩いていくが、35度を超える猛暑日、目も見えない上、感覚も半分死人のごとく鈍く、汗をかけない体質の紅倉は、芙蓉が外出するときは帽子をかぶるように！と口をうるさくして言うのも聞かず、直射日光をまともに浴びて、気が付く頃にはかなり危険な熱中症に陥っていた。

頭が痛くて、気持ち悪くて、ふらふらする。死ぬゝ、死んでしまっ。

どうも辺りはふつうの住宅街らしい。そのふつうの通りを、どうもバタバタと走り回っている人たちがいる。

いたか？ いや、そっちに回ったんじゃないか？ 畜生、往生際の悪い、行こう！、と、

紅倉のとなりをバタバタ3人ほど男たちが走り抜けていった。

あ、待つて・・・と心の中では手を伸ばしたいのだが、極度の対人恐怖症ですっかり固まってしまい、声も出せない。

ぐるぐる目が回ってきて、

あ、だめ、

さようなら美貴ちゃん、わたしは悪い子でした、ぐっすん、

と、ふらふら・・・と道に倒れ込もうとしたとき、前に立つ黒い人影を見て、寸前で踏ん張り、膝をついて座り込んだ。

黒いぼやーとした影は大きさからして子供らしい。

紅倉はもう後がないと観念して手を伸ばすと、

「み・・・水・・・飲ませて・・・」

と頼んだ。

影は、紅倉同様人見知りしているのか、ずーっと立ち尽くしていたが、紅倉が万事休すとぶっ倒れようとする、前に出て支えてくれた。

胸に潜り込んだその感触に紅倉は「え？」と思った。固い毛がふさふさ生えている。紅倉は一瞬「ひっ」と思ったが、もはやなんの動きも取れなかった。ズルズルと引きずられながら、意識朦朧と・・・

半分気を失っていたのだろう、突然頭から水をぶっかけられて「うひゃうっ」とびっくりして飛び起きた。ジャーーンと水の落ちる音がする。

今度は心臓発作で死にそうになりながら、はあっはあっはあー・・・と、ようやく落ち着くと、公園の水道の四角いコンクリートに前足を乗つけて、黒い大きな犬が紅倉を見下ろしていた。

紅倉が無様に手を後ろにお尻を付いて見上げていると、犬は器用に足で蛇口を閉め、地面に降り立った。

「い・・・犬・・・」

相手の正体に紅倉が固まっていると、犬はきびすを返して歩み去ろうとした。

ぼーっと見送る紅倉は、迫る気配にハッとした。

「待って！ 戻ってきなさい」

振り返ったものの動かない犬に、

「早く！」

紅倉はバタバタ手招きした。そして

「お手！」

左手を差し出した。

「お手！」

必死に言うつと、犬はのしのし歩いてきて、紅倉の左手に右手を載せた。

紅倉は嬉しくて笑った。

「よしっ！」

周りを見回した。マンションの陰になった小さな公園らしい。

ベンチがあつて、紅倉は急いで向かった。座り、となりを指して

「お座り！」

と命じた。犬はのしのし歩いてきて、紅倉のとなりの地面に座った。

「えーと・・・」

紅倉はタバタと、腰に巻いたベルト付きのポシェットを外し、犬の首に巻き付けた。紅倉は怖くて犬なんて触ったことはないが、ずいぶん首の太い犬だなと思った。

「大人しくしていなさいよ」

犬に命じて、自分は前を向いてお上品にお澄まししていると、タバタと、大人の男たちが駆けてきた。

02 黒い犬

「おい、あれじゃないのか？」

3人の男は白い女のとりに座る黒い犬を見て怪しんだ。ゆつくり近づいてきて、声をかけた。

「その犬、お宅の犬ですか？」

「はい」

と紅倉は答えた。

「そうですか・・・この辺りで似たような犬を見かけませんでしたか？」

「いいえ。うちの子だけですよお」

紅倉は愛犬家を気取って言った。

「そうですか・・・ところであなた」

「はい？」

「ずいぶん汚れてますね？」

「え？」

紅倉は白いTシャツに白いパンツ、白いサマーカーディガンを羽織っていたが、アスファルトをズルズル引きずられて茶色く、ほこりまみれになっていた。

「おほほほほ。この子のやんちゃに付き合っつてつい子供みたいにはしゃいでしまいましたわ。おほほほほ」

紅倉はぐりぐりぐりつと黒犬の頭を撫でた。犬は目をつむって大人しくされるままになっていた。三人はなお怪しんだが・・・

チャラチャチャチャーン、

「うひゃうっ」

紅倉は斜めに万歳してのけぞった。ドキドキしながら犬の首のポシエットから携帯電話を取り、あたふたしながら通話ボタンを押した。

「・・・・・・・・もしもし？・・・」

『先生。わ・た・し・です』

「あら美貴ちゃん？ えーと、その声は怒ってるのかなあ？」

『どこにいるんです？ 場所、分かってるんですか？』

「えーとー」

紅倉は電話を放すと男たちに訊いた。

「ここ、どこなんだろう？」

男たちは顔を見合わせ、

「ここは三平池南3丁目だよ」

と教えた。紅倉は頭を下げて、

「えーとね、三平池南3丁目ですって」

と電話に答えた。

『なんだ、じゃ近所なんですね』

紅倉はへ？と思ったが、

「そうなのよー。ちよつとそこまでお散歩に。おほほほ」

と誤魔化した。

「すぐに帰るから心配しないでねー」

と、三人に軽く頭を振って挨拶した。三人は行くか？と顔を見合

わせ、歩いていった。

「じゃね」

電話を切ると、紅倉は横目に男たちを追って、言った。

「保健所の人たちね。おまえ」

と、腹這いの犬に、

「処分されるところから逃げてきたのね」

言った。

犬はむっくり立ち上がると、のしのし歩き出した。

「あー、待て待て」

紅倉はおいでおいでと手招きし、よいしょと立ち上がった。

「わたし犬になんて生まれて初めて触ったわ。動物に触ったのも初めてかしら？」

紅倉は犬が大人しいのをよいことに、わしゃわしゃわしゃと毛

皮に触りまくった。

「そっかー、こんな感じなんだー、へー」

大喜びで触って、手を放すと、正面からじっと見た。

「あなたはわたしに吠えない。あなたは、わたしの同類なのね？」

じっと見つめ返す犬に、紅倉は言った。

「あなたはわたしの命の恩人ね。よかつたら、わたしのところに来ない？ わたしがあなたの飼い主になって、住む所と、一生分の食事を保証するわ。どうかしら？」

犬は探るようにじっと見ている。

「ただし、一つ条件があります。わたしと暮らすなら、わたしの飼い犬として、去勢手術を受けてもらいます。ごめんなさいね、わたしは子犬の面倒なんて、とても責任持てませんからね。あなたは自分の子孫を残せないのよ？ それでも、いい？」

犬はじつと紅倉を見つめ、お尻を付いて座った。

「いいのね？」

紅倉は犬の大きな顔を両手で押さえ、額にキスした。

「我が家にようこそ。うちにはさっきの電話のこわいお姉さんとお化けのお姉さんがいるのよ？ ま、あなたは平気ね？ そうだ、あなたの名前・・・」

紅倉は犬の記憶を視ようとしたが、犬はふんと横を向いた。

「そう。じゃあ新しい名前を付けてあげる。そうねー・・・」

紅倉はろくに見えない目でじいーっと犬の顔を見て考えた。

「ロデム」

紅倉はニイッと笑った。

「どう？」

「ワンッ」

犬は一つ吠えた。

「オツケー。じゃ、ロデム。さっそくだけど、うちまで案内してくれる？」

ロデムは知らんぷりした。

「あつそ。じゃあ・・・、捜しましょうか」

近所をぐるぐる回って、けっきょく2時間かけてようやく家に帰り着いた。

こわい芙蓉にたつぷり怒られたのは言つまでもない。

紅倉たちと、黒いシベリアンハスキー、ロデムの、出会いの日だった。

03 変死

9月。近畿地方の山中。ここに犬の繁殖場を経営する男が死んでいるのが見つかった。

その繁殖場というのは劣悪な飼育環境が問題視され、動物愛護団体としばしトラブルになっていた施設だ。

経営者の男は犬たちの檻が積み重なる前で、黄色い泥の中に顔を突っ込んで、うつぶせで死んでいた。その服装からここで作業をしているときに何らかのトラブルに遭って死亡したものと見える。発見したのは皮肉なことに抗議にやってきた動物愛護団体のメンバーたちで、発見したのは午前10時。死亡したのは前日の午後2時から3時の間と見られる。死んだ男は基本的に一人でここを経営し、死んだ時点で20頭の成獣と50頭の幼獣を飼育していた。

問題なのは死体の状態だった。

男はナイロンのウィンドブレーカーを着ていたが、それが少し溶けていた。

遺体を裸にしてみると、全身に低温火傷を負っていた。冬場携帯カイロを長時間直接肌にくっつけたままにしていると肌が赤く焼けてしまう、そのもう少し程度のひどいものだったが、これは直接の死因ではない。

死因は窒息だった。首を絞められたわけではなく、首には、自ら引っ掻いた痕があった。おそらく苦しみ悶えて喉を押さえたのだろう。窒息の具体的な原因は一酸化炭素中毒だった。今問題になっている、密閉空間で練炭を炊き、不完全燃焼を起こして一酸化炭素を充満させ、自殺をする、あれだ。しかし問題なのは、そこは屋外で、地形的にも通常一酸化炭素が濃く滞留するような条件にはない。地面に残る足跡から見て死亡したのがここであるのもほぼ間違いない。

低温火傷と窒息を合わせて考えると、

男性は、低温の炎に全身を包まれ、低温の炎によって一酸化炭素

が発生し、それに邪魔されて酸素を吸入できず、中毒を起こして、死亡した、と思われる。

現場で死体の周りには広範囲に渡ってめちやくちやに男の足跡がついていた。それだけ長く呼吸困難で苦しんだということだろう。どうしてそういうことになったのか？ 男の他には発見者である動物愛護団体のメンバーの足跡があるだけだった。

事故か、事件か？

真っ先に疑われたのは発見者であり、それまでたびたび死亡した男性とトラブルを起こしていたメンバーたちだった。動物保護、自然保護を称する団体には過激な手段に走る者たちも多くいるようだから。

メンバーたちは全面的に否定したし、そもそも事件とも断定できない。

結局変死というだけで、事件なのか事故なのか、謎のままなかば放置された。

しかし。

その数日後、同じような変死事件がさほど離れていない土地の、一般住宅の中で起こった。

同じく全身を低温火傷し、窒息死していたのだ。

この死んだ男性も、動物愛護団体とたびたびもめている問題のあるペットショップの経営者だった。

死亡時刻はしばらくれている。

男性は近所にあるペットショップで店の仕事をし、1時から家に昼食を食べに帰っている。いつもなら30分くらいで戻ってくるところ、2時を回っても店に戻らず、店員が家に様子を見に行くと、呼びかけても応答はなく、玄関のドアは鍵が開いていて、ドアを開いてみたところ、玄関に男性が倒れて死んでいた。

男性も長い時間苦しんだひどい死に顔をしていた。

警察が来て調べたところ、食べ残しの昼食があり、昼食の最中に変事に襲われたらしい。食事をしていた居間は物が落ち、倒れ、ここから外へ逃れようと玄関まで来て、力尽きたのか、それとも先へ進めない何か邪魔があったのか、とにかくここで死んだ。

鑑識の見る死体の状態及び普段の習慣から、死亡したのは1時5分から30分までの間と見られた。

その間の25分、前の変死事件で疑われた動物愛護団体のメンバーのアリバイが調べられたが、全員にアリバイがあった。団体の他のメンバーも調べられたが、おおむねアリバイが成立した。いや他の団体と協力して・・・と疑えばきりがないが、では問題はやはり、どうやって殺したか？、だ。

男性の衣服にも、居間や廊下の壁にも、低温の炎であぶられたとおぼしいすすが付着していた。

成分を分析すると、そこに、
リンの名残が見つかった。

リン。

動物の骨に含まれる、しばしば「人魂」の正体と言われる可燃物だ。

男性の家族は妻と二人の子がいたが、妻も仕事に出かけ、二人の子供もそれぞれ小学校と幼稚園に通っていた。

死亡推定時刻及び前後に何か変わったことがなかったか近所に聞き込みが行われたが、留守の家が多く、これといった情報は得られなかった。

事件はまた、謎のままである。

謎の解明につながるのかどうか、警察ははなはだ疑問に思う情報がちまたで話題になった。

夜、ドライブデートしていたカップルが、町から山に向かって大量の火の玉〓鬼火が、飛んでいく．．というか、走っていくのを目撃したというのだ。

大量の鬼火の目撃情報は他にも多数報告され、地元のテレビやラジオや新聞で、話題となった。

はたして二つの変死事件と関連はあるのだろうか？

04 魔犬誕生

9月、まだ残暑厳しい頃。

荒野、と呼んでいい景色があつた。

セメントの材料などに使う砂山が見渡す限り何もない土地にいくつか固まりつつ点在していた。

他にある物といえば大型のダンプカーが2、3台行ったり来たりするのと、

一軒だけ、長い湾曲した道路ばたに、家がぽつんと建っていた。

その境目も定かでない庭の外れに、道路にすぐ向かい合つて、

大きな頑丈な鉄格子の檻が置かれていた。

その中に巨大な犬が立っている。

牛ほどの大きさがある、と言つても言い過ぎではない。

ただし、手足が長く、胴も長く、顔も長く、耳と顎にふさふさと長い毛が生えている。

この長い毛が、今、この犬の不幸になっている。

本来ならとても優雅な出で立ちをしているだろうに、今この犬は長い舌を出してはあはあと荒い息をして、目を血走らせ、薄い茶の毛は薄汚れ、垢染み、自身の体からも床の鉄板からも悪臭を立ち上らせていた。黒い大きな蠅がブンブン周りを飛んでいる。

大型ダンプカーが前の道を走っていく。舞い上がる砂埃を檻はまともに浴びた。犬は堪らずその大きな体には狭い檻の中を苛々と歩き回ったが、また立ち止まり、はあはあと長い舌を出して、何か、少しでも良いことの起きるのを待った。

郵便配達バイクが止まり、郵便受けに手紙を落とし、犬と目が合った。

配達員は眉を曇らせ、怖そうに、バイクにまたがると行ってしまった。

犬は広がる荒野を見た。黒い影になっている天板を見た。照りつ

ける太陽が、やがて傾き、強烈な西日となって差し込んでくるだろう。今日もまた地獄の時間が巡ってくる。

犬の目はうつろになり、まぶたが閉じてきて、ついに、しゃがみ込んだ。激しい直射日光が当たる。

それを避ける力は、もう、この偉大な犬には残っていないようだ。午後の地獄の時間を、乗り切れることは出来るのだろうか。

夜。7時を回ってこの家の主が帰ってきた。彼自身小型のトラックに乗って、この広い資材置き場の管理の仕事を請け負う小さな会社の社長なのだ。50代の彼は、2年前に奥さんと別れ、子供たちも奥さんが連れていき、この寂しい一軒家に一人暮らしをしていた。いや、本来ならその寂しい暮らしに潤いを与えるパートナーであった犬がいるのだが。

主人はトラックを降りてくると、家に入る前に犬の所に向かい、底の厚い靴で檻を蹴った。ガーンガーンと金属の重い音が響き、それでも、床にぐったり寝そべった犬はぴくりとも動かなかった。主人はじつと見て、もう一度蹴った。犬は動かない。

「ようやくくたばりやがったか」

西の景色を見る。水色の微妙な色合いでまだ空には明かりがある。「これ以上臭くならねえうちに埋めちまうか」

家の裏に小型のシヨベルカーがある。

それを動かして穴を掘り始めた。土地ならいくらでもある。

人間の大人が十分入れるだけの穴を掘り上げた。

シヨベルカーのエンジンを切ると、主人は家に入り、大きな鍵の束を持って出てきた。

ガチャリと鍵を回して、用心しながらギイイイ、と半分扉を開けた。

足先で、犬の投げ出された後足をつつき、腹をつつき、蹴った。安心して扉を開け放った。

「くっせーなあー」

犬のように鼻の上にしわを寄せ、腰を折ると、犬の後足2本を掴んで、その巨体をズルズル外に引きずり出した。思ったよりすんなり動かせた。もう2ヶ月間餌も水も与えていない。毛皮の下は実は骨と皮ばかりだった。

「まったく、犬なんて飼うもんじゃねえな、面倒臭せえ」
ズルズルと、裏に掘った穴に引きずっていく。

日は沈み、西の空の明るさもずいぶん黒ずんできた。

青い光が、三角の山の影を縫ってちらちら瞬いた。

いや、数十、数百というたくさんの青い光・炎の群れが、長い曲がった道を走ってくる。

青い炎の群れは、一軒家を目指してひた走ってきた。
それと気づかず主人は犬の死骸を

「そーれ」

と穴に放り投げた。

ぱさりと落ちた犬は、かすかに顔を上げた。

主人はびっくりした。

「このくそ犬！ まだ生きてやがったか！

待ちやがれよ！」

シヨベルカーに向かった。十分な深さは掘ってあるので、このまま生き埋めにしてしまおうと考えたのだ。

夢中でエンジンをかける主人は、視界の中を走る青い光を向こうの道路を走るくそ暴走族どものライトが飛んできているのだからと気にもとめなかった。

ブルルルル、とエンジンがかかった。

「さあ覚悟しやがれ・・・」

正面を向いた主人は、口をあんぐり開けた。

犬が穴の外にすつくと立っていた。

ガルルルルルル・・・

目を青く爛々と光らせ、恐ろしいうなり声を上げた。

「て、てめ・・・」

「ワウンツッ！」

犬の空気を震わせる強烈な一声に主人はひつと身をすくませた。

犬は本来の優雅さを取り戻した軽やかな足取りで駆けてきた。主人は慌ててシヨベルを操るレバーに手をかけたが、犬はすたつとキヤタピラーのカバーの上に乗リ運転席に首を突っ込んだ。

「ひいひいひい」

主人は腰を抜かして地面へ転げ落ちた。

「いてえっ」

その両肩に足を置いて、犬が降り立った。

「ガルルルルル・・・」

「ひひひひひひひひひひ・・・」

震えて歯の根も合わず、主人は犬の背後に浮かぶ青い炎、鬼火に気づいて、また恐怖に突き落とされた。

魔犬。

この犬は、地獄から舞い戻ってきたのだ、

さんざんひどい目に遭わせた男に復讐するために。

「ひひひひひひ・・・ゆ・・・ゆるし・・・て・・・」

犬はぐあぁと大きく口を開き、主人の喉笛に噛みついた。

久しぶりの食事を終え、犬は優雅に残飯を穴に捨てた。後ろ足で土をかける。

地獄から甦り、牢獄からの自由を手にした犬は、しかし爛々と光る青い目の色を落着かせようとはしない。

彼に再びの生を与えた青い炎の群れが、彼に我らが復讐も成せと期待する。哀れな同族を救い出せと期待する。

アオオーーーーーー・・・

犬は遠吠えを発し、彼らの願いを聞くことを約束する。

復讐は、始まったばかりなのだ。

王を迎えた青い炎の軍団は、王に従い、次なる敵を求めて、町の光を目指し、意気軒昂に駆けだした。

動物愛護団体に悪評高いペットショップでまたも変死事件が起きた。

店主と店員の2名が殺されていた。

またも死体に低温火傷の痕があったが、今度ははつきり殺されたと分かる。

二人は喉を噛みちぎられていた。

歯形が先に見つかった建築資材運送業の男性の死体の傷口と一致した。

店には2台の防犯カメラが設置され、犯行の様子が克明に記録されていた。

この町中にあるペットショップは深夜0時まで営業していて、これが動物たちによくないと団体が抗議していたのだが、

その閉店間際、店内に無数の鬼火が浮かんだ。

店主と店員は驚き、しかしこの不思議な現象にわりに落ち着いて眺め、騒ぎ立てる商品の犬猫たちを叱りつけた。

ところが、この鬼火たちがいつせいに二人を襲ってきた。

二人は全身を青い炎に覆われ、呼吸が出来ないようで、喉を押さえて苦しがつた。

外へ逃げようとする、自動ドアが開いて巨大な犬が入ってきた。

驚いた二人は奥に逃げ、体を巻いた炎が自由を奪うように渦を巻いて燃え上がり、

苦しんで倒れたところを、巨大な犬が悠然と歩いてきて、

店員の首を噛み、投げ捨てると、

店長の首を噛んだ。

投げ捨てると、鬼火は徐々に消えていき、

犬はまた悠々と自動ドアを出ていった。

ケージの中の犬猫たちが興奮して騒いでいる。

あまり犬猫がうるさく騒ぐので、近所から苦情の電話が行き、警察がやってきて、この変事を発見した。

監視ビデオの映像は犬が入ってきた一部がテレビで公開され、人を噛み殺したこの巨体の犬を、人々は、かの有名なシャーロック・ホームズ物語の傑作に登場する魔犬になぞらえ、「バスカヴィル」と名付け、恐れるようになった。

05 可愛い子犬

10月。東京。山手線沿線のきらびやかな繁華街。

夜、仕事帰りに仲間と一杯やって、一杯のつもりがつい遅くまで飲み過ぎて、赤い顔でまいったなと思いながら歩いている男がいた。さあて上さんにどう言い訳しようかなと酔っぱらいの頭を働かせていると、綺麗なお姉ちゃんが上等なスーツの紳士と腕を組んで歩いてきた。

ちつくしょー、俺もあんなお姉ちゃんのいる店で飲んでみてえなー、と思っていると、

上級紳士は片手に小さなかごを持っている。インコなんかかと思つて見ると、中に入っているのは子犬だった。

すれ違い、ヘーさすが金持ちのプレゼントは違うもんだと感心した後ろ姿を見送ったが、しばらく行くと、もうずいぶん遅い時間だというのにペットショップが開いていた。このご時世どんな業種も24時間営業だなと冷やかしかし半分でショーウィンドウを覗くと、案外安い。さつき紳士が連れていった人気の種類もそれほど高い物でもない。

なんだよ、これなら俺だってお姉ちゃんに買ってやれるぞと思つて、思いついた。

そうだ、これにしよう、と。

朝、娘の奈緒6歳が目覚めると、家に子犬がいた。

奈緒は歓声を上げて喜んだ。

ぬいぐるみのようにかわいらしい毛の長い真つ白なテリアだ。

段ボールの急ごしらえの部屋に新聞紙を敷いた上に体を丸めて眠っている。

奈緒が抱き上げると子犬は目を覚まし、いやいやをするように逃

げだそうとした。奈緒はだいじょうぶだよおといい子いい子をしてあげた。

娘のかわいいがる様子を見て父親はな？と妻に勝利の笑顔に向けた。妻はしょうがないわねと笑いながらため息をついた。

「ほら、奈緒、まだ赤ちゃんで眠がつてるから、眠らせてあげなさい。手を洗ってきて、朝ご飯食べなさい」

娘がはい！と返事をして犬を置いて洗面所に走っていくと、妻は夫を睨んで言った。

「なによ、奈緒にばかりいい顔して。どうせわたしが面倒見なくちゃ駄目なんでしょう？」

夫は笑っていなした。

「なんだよ？ かわいいだろう？ おまえだつてすぐ夢中になって亭主の晩酌なんて放っておくようになるんだ」

「で、あなたはまた遅くまで飲み歩いてくるってわけ？」

「だからさ、それも気にならなくなるって」

「まったくもう、調子いいんだから」

娘が戻ってきて食事が始まった。奈緒はよそ見をして犬を見てばかりいた。

夫は会社に出かけていく。妻は娘を幼稚園バスに乗せて帰ってきて、犬を覗き込んだ。子犬はまだ眠っている。生まれてどのくらいなのかしらと思う。ホワイトテリアというのは見て分かるけれど、旦那が買ったペットショップからもらってきたのは商品の保証書だけで、血統書なんていう上等なものはない。どうせ安い店から買ってきたんでしょうけれどと妻はお見通しだ。高い店で血統書付きの犬なんて買ったらすごく高いんだろし、今は大喜びしている娘もいつまで関心が続くか分からない。初めて飼うペットにはお手頃だろう。

「ま、それに、命は同じ命で尊いものね、あなた、うちに買われてきてラッキーだったわね」

妻は子犬の飼い方でも調べてみるかとパソコンに向かった。

幼稚園から帰ってきた娘は子犬をかわいがった。夕方になってやっと目を覚まし、ミルクを飲んだ。

娘にだっこされて、震えていたが、大人しく抱かれていた。

娘はいい子いい子し、妻も大人しい性質のいい子犬に当たったなと喜んだ。

3日が過ぎた。

娘が幼稚園に行ってる間に、妻は犬が動いていないのに気づき、死んでいるのを確かめた。

嫌な顔をして、夫に電話した。

夫も困って、妻に保証書の電話番号を聞き、ペットショップに電話した。

ペットショップは親切に対応し、代わりの子犬を無償で提供するという。

妻に保証書を持ってこさせ、昼休みに急いでペットショップに向かった。

妻と一緒に、店員にも健康そうな子犬を選ばせ、代わりの犬をもらい受け、妻は急ぎ帰っていった。

奈緒がバスで送られてきて、迎えた妻は説明しようとしたが、奈緒は早く早くと母を急かして走り、結局言い出せずに家に帰った。

「リボンちゃん！」

自分が名付けた名前を呼んで子犬を抱こうとした奈緒は、段ボールの中を見て固まってしまった。

母を見上げて訊いた。

「リボンちゃんじゃないよ？」

同じテリアでも色が白から茶と黒の2色になっていて、これは誤

魔化しようがない。

母は仕方なく、考えながら説明した。

「あのね、リボンちゃんはすごく寂しがりやで、お母さんと離ればなれになって寂しくて病気になっちゃいそうだったの。かわいそうでしょう？　それでね、お母さんの所に帰してあげたの。奈緒だってお母さんと離ればなれになったら寂しいでしょう？　ね？　代わりにね、この子が来てくれたの。ほら、この子は元気でしょ？　この子はやんちゃだから一人でもへえっちゃらよ。ね？」

新しい子犬はキャンキャンと元気に吠えている。

明らかに不満顔ながら、奈緒は一応母親の説明に納得し、新しい子犬と仲良くしようとした。

しかしキャンキャン吠える子犬は子供の手を逃れてびよんびよん飛び跳ねた。

「元気だね」

と言いながら奈緒は手を引つ込めてしまい、母親は少し不安に思った。やはりかわいがっていた犬がいなくなって幼い心にショックを受けているのだ。やっぱり犬を飼うのは早かったんじゃないかしら、と夫を恨めしく思った。

娘のかわいがっていたリボンちゃんが、黒いビニール袋に入って家の裏のポリバケツの中にいることは絶対に言えない。

茶と黒の子犬は元気だった。始終キャンキャン吠え、動き回り、夜灯りを消してからもまだ吠え続けた。

布団の中で鳴き声が気になって眠れず、妻は夫に言った。

「あんなに鳴いて、近所迷惑よ？」

夫も困ったものだといらだちを抑えて言った。

「まったくなあー。かわいいと思ったのに、小さい犬つてのは駄目なもんだなあ。やっぱり安い犬つてのは質が悪いんだなあ」

「びっくりしたわよ、あんなに安いなんて。ほら、子供の頃、お祭りで金魚すくいなんてやって金魚持つてくるとすぐに死んじゃった

でしょう？ 安いのってみんなそうなのよ」

「はいはい、わたしが悪うございました。安かろう悪かろうでございました。もうあんなのは買いません」

「それでどうするのよ、もうー・・・」

鳴きやまない犬に妻はうんざりして言った。

「どうするって、しょうがないだろう？ もう少し様子見ろよ。犬だって環境が変わって興奮してるんだよ。その内落ち着くよ」

「そうだいいんだけど・・・もうっ！」

妻はこれ見よがしに頭に布団をかぶった。

夫もうんざりして、やっぱり布団を引っ張り上げた。

1週間経っても子犬の無駄鳴きは治らなかった。

日曜日、父親が居間でいつしよにいるとき、奈緒がなんとか仲良くなろうと出した手を、子犬は噛んだ。

「痛いっ」

とびつくりした奈緒は顔面蒼白になり、怒った父親は犬を叩こうとした。

「お父さん、カカオを怒らないで」

カカオというのが2代目のこの子犬の名前だ。

「でもなあ奈緒。犬っていうのはちゃんとしつけをしてやらないと駄目なんだよ？」

「でも・・・怒らないでえー・・・」

涙目で頼む娘に、夫は台所から覗いていた妻と顔を見合わせた。

それからまた2日して、奈緒が幼稚園から帰ってくるとカカオはいなくなっていた。

「ごめんね、お掃除するのに戸を開けたら逃げ出しちゃって。捜したんだけど、見つからないのよ」

奈緒は悲しくて泣いた。母は頭を撫でて慰めて言った。

「ごめんね。カカオは元気すぎて、外で自由に暮らすのがいいのよ。」

今度お父さんのボーナスが出たら奈緒もいつしよにペットショップに行つて新しい犬を選ぼう？ね？」

本当は。

無駄鳴きの治らない子犬にうんざりした夫と相談して、奈緒を送り出した後で車に乗せて遠くの橋の下に置いてきたのだ。

優しい母親を演ずる妻は、その後保健所の回収車がやってきて力才を回収していったとは夢にも知らない。

回収された力力才が、夫婦を悩ませた無駄鳴きによって即刻「失格」の烙印を押されたことを知らない。

力力才は保健所で多くの仲間たちと出会った。

数日後に運命を共にする仲間たちと・・・。

06 魔犬襲来

保健所に回収されてきた犬は、問題のない犬は里親を募って、現れれば、引き取られていき、第2の人生をスタートさせることが出来る。

けれど、引き取り手の現れなかった犬、及び最初から問題のある・病気であったり、やたらと吠えたり、攻撃的であったりする犬は、何もない狭い部屋に閉じ込められ、数日間餌を与えられず、弱ったところを、まるで宝探し映画の遺跡の仕掛けみたいに壁が動いてきて隣の更に狭い部屋に追いやられ、そこで二酸化炭素を噴出させて窒息死させる。

今日もまた、そうして多くの不幸な犬たちがガス室に送られようとしていた。

職員がボタンを押すと、ゴー・・・と壁が動いてきて犬たちを追いつつ立ってた。

犬たちは驚き、戸惑い、壁にお尻を押されてはキャンと鳴き、慌てふためいて飛び回った。壁は同じ速度で確実に迫ってくる。犬たちはうろろろしながら、ぶつかり、押し合いながら、抵抗できずに狭い通路を先の部屋へ送り込まれていく。キャンキャンアオーン、と、不安の声を上げる。

それが、職員が次のボタンを押すと、悲鳴に変わった。

職員は冷静にその様子を眺める。失敗の無いように、一度に確実にあの世に送り届けてやるように。

表の方でガラスの割れる派手な音が聞こえた。わーわー騒ぐ声が出て、当番の仲間となんだろうと顔を見合っていると、コントリールームのドアを何者かが、ダン！、と叩いた。ダンッ、ダンッ、ダンッ！

ただごとでない様子に顔を強張らせて見ていると、上のガラスの

小窓を顔が覗いた。職員二人は思わずわつと声を上げた。

覗いたのは犬だった。顔の長い、大きな洋犬だ。職員たちを見て目が青く爛々と光っている。

顔が引つ込むと、再び、ダンッ！　ダンッ！　とドアを叩き出した。

ギッ、とドアのちようつがいがずれた。

ダンッ、バアーッン！！！！

派手な音を立てて鉄製のドアが倒れてきた。

そこに立つ犬を見て二人は総毛立ち、腰を抜かしてズルズルと座り込んだ。

でかい。

数多くの犬たちを見てきた二人にも、その巨体はけた違い、規格外だった。

すらりと脚が長い、その脚も農耕馬のように図太く強靱だった。犬の目は青く爛々と光り、その背後に同じ色の炎がぼつぼつと灯り、すーっと室内に入ってきた。

犬はすたすたと優雅に足を運び入ってきた。腰を抜かして尻で這う職員を追い越し奥へ向かう。

ガラスの窓越しに、苦しみもがいた挙げ句に今はぴくりとも動かなくなった犬たちが折り重なるように倒れていた。野良の雑種から形のいい中型犬、かわいらしい小型犬、ゴールデン・レトリバーや、チワワやコーギーといった人気犬、ぬいぐるみのようなマルチーズ、巻き毛のテリアもいた。

職員二人はあわあわとドアの無くなった出口に這っていった。

後ろの一人の頭を踏みつけ、前の一人の背中をどつかと前足で押さえた。

「ガルルルル・・・ガウッ、ガウッ、ガウッ」

怒りに充ちた大きな吠え声が狭い空間にびんびんと反響した。

職員たちはひいと耳を押さえて震えた。

犬は背中に置いた足を下ろすと職員の耳元で「ガウッ、ガウッ、

「ガウツ！」と大声で吠えた。

「ひいいいっ」

職員は震え上がって起き上がり、その顔を犬は正面から睨み付けた。

「ガルルルルルルルル・」

「ひ、ひ、ひいいいー・」

間近でうなる巨犬の迫力に押し返したい手を中途半端な位置でぶるぶる震わせ、ガクガク震えて、とうとう「えっえっえっ」と犬みたいな顔になってべそをかき始めた。

「ゆるしてくれよー・。だつてさあー、俺だつてさあー、こんな・こと・したくなんてないよ・。でもさあー、しょうがないじゃないかよー、俺、飼つてやることなんて出来ないもん・。俺だつて助けてやりたいけどさあー、捨てる奴ばっかりで、もらつてくれる人なんてなかないんだもん・。毎日毎日、俺たちだつて、嫌なんだよおおー！・」

ガルルルルル・とうなっていた犬は顔を離すと、恐る恐る様子を見る職員に、

「ワンツ！」

と吠えてすくみ上がらせ、きびすを返すとすたすた出ていった。

青い炎たちが後を追ひ、

ガス室で死んだ犬たちからも次々体から同じ青い炎が浮かび、先の群れを追ひ合流していった。

残された職員たちはだらしなく手足を投げ出したまま「えっえっ」といつまでもぐずぐず泣いていた。

これはあの2代目テリアが捨てられた河原のエリアの話ではない。魔犬バスカヴィル率いる鬼火の群れは近畿から東海エリアに入り北上中である。途中こうした場所を襲撃しつつ、東京到達にはまだしばらくかかりそうだ。

その間数日経ち、あの哀れなテリアの命運には、魔犬はついに

関わることはなかった。

07 紅倉への依頼

11月。ペットの犬を虐待していた飼い主が逆に犬に噛み殺される事件が起きた。

目撃した家族の話によると主人が犬を叩いていると庭に巨大な洋犬が現れ、するとペットの柴犬が俄然攻撃的になり、鎖を引きちぎって主に飛びかかり、噛み殺したという。

柴犬はそのまま洋犬と共にどこかに行ってしまった。

被害者が続出し、自治体も警察も人殺しの猛犬バスカヴィルの捕獲または殺害しようと大規模な作戦を展開したが、バスカヴィルは常にその裏をかいて逃げおおせた。

恐怖に怯え警察の無能を批判する人がいる一方、虐待される哀れな犬たちを救い復讐を行うバスカヴィルをむしろ応援する人々もいた。

紅倉美姫もどちらかといえば後者の人間だった。

複数の動物愛護団体の代表者たちが紅倉を訪問した。

彼らは表の犬小屋にいる黒いシベリアンハスキーを見て、彼女が愛犬家であることを喜んだ。

芙蓉にお茶を出されて、4人の代表のうち一番年輩の男性が代表して話した。

「バスカヴィルと呼ばれる犬が近畿から東海にかけて人やペットシヨップや施設を襲っている事件はご存じでしょう？ そのバスカヴィルを、退治していただきたいのです・・・」

総白髪で日焼けした薄い皮膚の男性は苦しそうな悲しそうな顔でそう依頼した。

紅倉は焦点の定まらない目でしらばっくれて問う。

「なんでわざわざこんな遠くまでわたしなんかに頼みに来るんです？ 野良犬の処分なんて、保健所の仕事でしょう？ 警察の方々も頑張っておられるようだし、わたしなんかの出る幕はないでしょう？」

「バスカヴィルはふつうの犬ではないんです。おそらく警察も彼を殺すことは出来ないでしょう。」

バスカヴィルといつしよに数多くの鬼火が目撃されているのもご存じでしょう？ あれは、死んだ犬たちの魂だと思われれます。バスカヴィル自身、ふつうではない、靈魂の？ 力で動いているように思われるのです。

バスカヴィルは犬たちの復讐の鬼です。・・・わたしたちもその気持ちには分かるのですが・・・。

これまでに彼は6人の人間を殺害し、30名以上にけがを負わせています。他に彼らが関わっていると思われる死者が10人もいます。また飼われている犬が飼い主を襲い噛み殺したのが2件、飼い主を襲ったという報告がなんと500件も寄せられています・・・もつともこの中の大半はバスカヴィルとは無関係の、日頃の飼い方の問題だと思うのですが・・・。

問題はそこなんです。

我々の仲間にも過激な方法に訴えてでも動物たちを保護しようと活動するグループがありますが、そうした方法は飼い主や業者といらぬ敵対関係を生んでしまい、けっして動物たちへの処遇の改善にならない、むしろ態度を硬化させてしまい、より冷たい態度をとらせてしまうことが恐れられます」

紅倉は冷笑を浮かべて言った。

「テロリズムは問題の解決にはならない、ですか？」

紅倉の皮肉に代表は素直にうなずいて言った。

「その通りです。これまで我々は動物の生き物としての当たり前前の権利を訴え、関わる人たちに動物への愛情を持ってくれるように根気強く説得する活動をしてきました。しかし・・・、

バスカヴィルが人を襲うようになって、飼い主や業者たちにわたしたちの話をまるで聞いてもらえなくなってしまった。おまえたちはあの人殺し犬の仲間たちなんだろう？」と。

我々考え方を異にする人間との敵対感情が、扱う動物たちへの敵対的な見方になり、より厳しく冷たい管理方法に拍車をかける結果を招いてしまっているのです。

これは、とても不幸なことです。

動物たちと愛情で結ばれれば、それは人間にもたいへんな幸福をもたらししてくれるのです。

彼らにそれを分かってもらいたいのですが、

バスカヴィルがいては、

彼らはそうした考えに耳を傾けてはくれないのです・・・」

紅倉は、

「ふっ」

ととうとう声に出して笑った。

怪訝そうに見る代表たちに紅倉は軽蔑気味な冷たい表情で言った。

「犬たちの不幸な問題は、そうした甘ったるい感情論で解決できる類のものなのでしょうか？」

わたしはバスカヴィルの行動に大いに賛同しています。

自分が怖い目に遭って殺されるのが嫌なら、犬たちをそういう目に遭わせなければいいんです。実に簡単明瞭な主張じゃないですか？
そういうことではないのでしょうか？この業界の問題は？

資本主義の自由競争です。

需要と供給のバランスです。

犬は商品です。

ジーンズが1000円以下で売られる時代ですよ？ 血統書付きの純血種だろうとなんだだろうと、

高くちや売れないでしょう？

人気の種類の犬が欲しい、でも高くちや嫌だ、

だから、ふつうの半分の値段の犬が売れるんでしょう？

犬を半分の値段で売って利益を確保しようと思ったら、半分以上の手間で、半分以上のサイクルで、大量の商品をさばかなくちゃならないでしょう？

そうして生み出された大量の子犬たちは、生まれたときから問題を抱え、病気のものも多く、さらに劣悪な環境で飼育され、見せ物にされ、病気になったり、情緒不安定になったり、死んだりするんです。商品にならないと判断された子犬はどう処分されるんですか？

運良く買われていった子犬だって、その程度の買い物ですから、面倒な世話なんてすぐ飽きちゃうでしょうし、ブームが去れば今度はこの犬がいいと簡単に次のモデルに乗り換えるのでしょうか？

それが消費者のニーズです。業者はそのニーズに応え、尚かつ自分たちの経済を維持していかなければなりません。

そうして大量に生み出され、ちまたに大量にばらまかれ、あぶれて処分され、消費されて捨てられた、

命が、

彼らです。

でもどうせこの社会は、人間でさえニーズだけ満たして使い捨てられる、そういうシステムになっていますから、今さら犬だけが特別ではないでしょう？」

どうです？と首を傾げて問う紅倉に、代表たちはさすがに気色ばみ、代表が苛立ちを抑えて言った。

「分かってます、分かっているんです、わたしたちはそんなこと、とつくに。」

感情論で道徳心に訴えるだけでなく、行政によるきちんとしたルールづくり、それがもっとも肝要だと、わたしたちも分かっている、そうした訴えもしています。しかし・・・」

「業界からの圧力が強くて、ついつい弱腰になってしまっ？」

「そう・・・です・・・」

「事なかれ主義ですからねえ、お役所は。それに、生活がかかっていると言われれば、強くも出られないでしょう」

「ええ・・・」

「だからでしょう」

「？」

「だから」

紅倉は恐ろしい目で言った。

「死ぬほどの目に遭えばいいんです」

けっきょく紅倉はバスカヴィル退治を受けず、代表たちはとぼとぼと帰っていった。

その後紅倉は犬小屋の前に行つてしゃがみ、寝そべるロデムに訊いた。

「ねえ、あなたはと思う？ あなたもやつぱり彼の味方？」

ロデムはルビーのような赤い目を開けて紅倉を見た。

「そうよね、あなたは彼の味方よね？」

紅倉は自分を納得させるように言った。

しかし。

ある家で、室内で飼われているスパニエルという小型で胸から腹にかけて毛の長いいたずら好きの子供のような犬だったが、

ある時飼い主である中年女性にやたらと吠えた。

「こら、静かにしなさい」

と注意したが、このとき犬はやたらと気分がハイになっているように、鳴きやまなかった。

「しょうがないわねえ」

昼間であつたから遊びたいのだろうと思つたのだが、ふと、いつもより鳴き声がキャンキャン甲高いように感じた。そこでテレビのニュースを思い出した。

飼い犬が突然反抗的になつて飼い主を噛み殺したというニュースだ。

中年女性はまさかと思いながら、怖くなった。

女性はとりあえず外へ避難しようと玄関に下りた。

ところが犬は先回りしてますますキャンキャン吠えた。遊びたいだけだ、遊びたいだけなのだと思ったけれど。

「静かに。静かにしなさい」

犬は鳴きやまず、

女性は夫が庭でスイングの練習に使うために置いてあるゴルフクラブに手を伸ばした。

「静かに、静かに、しなさい・・・」

たまたま隣から回覧板を持ってきた主婦がその現場に遭遇し、悲鳴を上げ、中年女性は動物虐待の容疑で逮捕された。

犬は、ただ単に主人に遊んでほしかっただけなのだろう。

紅倉は暗い気分でニュースを眺め、ロデムに会いに行った。

「いつしよに来てくれる？ あなたの手助けが必要な」

月は、12月に改まるうとしている。

08 助っ人

世間の囂々たる非難にさらされて警察もやつきだ。それまでめらわれていた市街地での発砲も、十分な注意の下、使用が許可された。

バスカヴィルに命中した、という報告がされたが、その後もバスカヴィルの活躍は続いた。

やはり彼にふつうの方法は通じないようだ。

しかしここに来てバスカヴィルの活動が止まった。

どこかに潜伏して次の襲撃ポイントを探っているのか、それとも既にさんざん暴れて気が済んだのか？

5日経ち、7日経ち、

師走に入った街はクリスマスの飾りにきらめき、年末の予定に心をうきうきさせた人々の頭から次第にバスカヴィルの脅威は薄れていった。

八王子に宿を取った紅倉は知っている、東を望み、バスカヴィルが既に次の、最大の攻撃の準備を整えて潜伏を完了していることを。その気配を探って紅倉は戦慄し、危うく卒倒しかけた。

相変わらず犬は大の苦手だった。相棒ロデムだけは特別なのだ。

ロデムは特別に盲導犬としてホテルへの入室を認めてもらっている。バスカヴィル率いる群れは1000に及ぶ大群になっている。

千だろつと2千だろつと悪霊怨霊にびびる紅倉ではないが、バスカヴィルの軍団の中には生きた犬が数十頭混じっていた。

これは警察と連携して当たらなければならないが、これだけの数の霊はさすがに紅倉にもさばききれない。

相手が幽霊でも、やっぱり犬は苦手だ。

バスカヴィルは頭もいい。紅倉が出ていけば、すぐさま紅倉対策のフォーメーションを軍団に指示するだろう。

助っ人が必要、と考えているところに依頼主の動物愛護団体代表

が訪れた。

挨拶を交わし、紅倉が求めたバスカヴィルの情報を教えてくれた。

「バスカヴィルはボルゾイという種類の犬です。ロシアを紀元とし、オオカミ狩りのために改良された最大級の大型犬です。別名、ロシアン・ウルフハウンド。

狩りのために改良された犬ですから、強靱で、チームワークがよく、主人の言うことをよく聞きます。当然頭はいいです。少し繊細すぎる嫌いがあるでしょうか。

本来きちんとしてければ非常にマナーの良い犬です。長年ロシア貴族に愛され、受け継がれてきた、まさに犬の貴族と言っていいでしょう。

成犬の雄で体高70センチくらいになりますが、バスカヴィルは、1メートルを優に越します。

まさに、王の貴祿ですな」

話を聞きながら紅倉は青くなった。これまでで最強の敵かも知れない。

そこで訊いた。

「犬の神様って、いないでしょうか？」

作戦を話し合い、警察への連絡を頼み、代表を帰した。

芙蓉が心配して訊いた。

「先生。今回は、無理なんじゃありません？」

「無理よねえ？やっぱり」

紅倉は涙目でべそをかくように言ったが、大人しく座るロデムの頭を撫で、

「だから、今回はあなたたちの力を借りなくちゃ勝てないわ。美貴ちゃんも」

芙蓉を見て言った。

「美貴ちゃん。あなたは犬の神様の所に行つて、協力をお願いしてきてちょうだい」

「わたしがいなくて、その間大丈夫ですか？」

「ええ。頼もしいボディーガードがいるから」

につこりロデムを見る様子に芙蓉は思いつ切り嫉妬した。

「そんな顔しないで」

察して紅倉は苦笑いした。

「そうだ、美貴ちゃん、ロデムを連れて辺りを歩いてきてくれない？ いつもわたしといっしょじゃロデムも運動不足だわ。ロデム。いいわね？」

じいつと目を覗き込まれて、ロデムはのつしと立ち上がった。

まるで付いてこいと言わんばかりに先に立ってドアに向かった。

「じゃ、美貴ちゃん、いつてらっしゃーい」

バイバイと手を振られ、芙蓉は憎々しげにロデムを睨んで、仕方なく後を追った。

平日の午後2時を回ったところ。

ロデムを連れた芙蓉は駅の周りに広がる繁華街を抜け、住宅地を歩いた。

「ほらロデム、富士山が見えるわよ」

とせいぜいフレンドリーに教えてやったが、ロデムはちらと見ただけでフンというように前を向いて先を歩いた。紐を引っばられて芙蓉は『この』と思いつながら歩いた。ロデムは黒い首輪に赤いリードを付けている。首輪には、芙蓉は不用心だからやめるとさんざん言ったのだが、「紅倉ロデム」と刻まれた銀のプレートが付いていて、ご丁寧に自宅の住所まで刻まれている。紅倉はこの犬をべた可愛がっている。芙蓉ははなはだ面白くない。

川岸を歩いていると、ロデムは不意に立ち止まり、向こう岸に向かって

「ワン」

と一声吠えた。

「なに？」

芙蓉はロテムが吠えた辺りを見て、

『ははあー、そういうことか』

と納得した。

芙蓉もロテムといっしょにしばらく待って、

「じゃ、帰りましょうか？」

と言ったが、ロテムはそのまま駅と反対方向に歩き続けた。

「あなた、本当にわたしに散歩を付き合わせる気い？」

ロテムは一度振り向いて、来い、と首を振った。

「こんにゃろ」

よし・・・と思い、

「行くわよ！」

芙蓉は走り出し、ロテムもいっしょに走った。

まるで昔の刑事ドラマか青春ドラマみたいだった。

09 合戦

金曜日、午後8時。

帰宅ラッシュが一段落したとはいえ、きらびやかなネオン街はまだまだこれからが本番で、通りは多くの人と車が行き交っていた。通りを歩く人の中にあの父親がいた。彼は思っている。

あゝあゝ、今年のボーナスは少なくなるなあー。あーあ、家のローンどうすんだよ？ あゝあゝ・・・。

またいつもの所にやってきて、この先にペットショップがあるのを思い出した。

娘はあれから、リボンちゃんは帰ってこないの？、とうるさい。自分から出ていった力カオよりやっぱり最初の白い大人しいリボンの方が気に入っていたようだ。

妻は今度はちゃんとしたペットショップで血統書付きの犬を買おうと娘を慰めたようだが、冗談じゃない、そんなリクエストに応えられるだけのボーナスはもらえそうにない。

ペットショップのショーウィンドウが近づいてきて、失敗した過去を思い出し、見ないようにして通り過ぎようとしたが、待てよ、

と、立ち止まり、疑うような顔つきで三段に並べられたショーケースの中の子犬たちを眺めた。

子犬を買ったから失敗したんだ、ある程度育った犬なら、体も丈夫になっっているだろうし、人気が無くなって値段が下がっているかも知れないぞ？ そっちの方がお買い得なんじゃないか？

そんな掘り出し物がないかな、と、探るように店内を見回した。

大都会の真ん中を、

巨大な犬が十数頭の犬を引き連れて、どうどくと歩いていた。

驚き道をあけた人々は恐る恐るその後ろ姿を追い、「バスカヴィ

ル？」と口々に確かめ合った。

「どうやってこんなビルの林立する都会に入り込んだ？」

都会にも意外にまとまった緑が多い。大きな緑から緑へ、夜の闇を渡り歩き、あるいは人の目をかいくぐり、建物の隙間に、ビルの緑化の植え込みの陰に、彼らは巧みに都会の盲点について中心部に入り込んだのだ。

巨大な犬が現れても都会の人たちはクールにやり過ごし、あるいは遠巻きに追いかけて、携帯のカメラに撮り、自分が一番乗りだとネットに動画を流した。

静かな騒ぎの中、慌てたお巡りさんたちが駆けてきた。道を開けてください、近づかないでください。

しかしさすがにここで発砲するわけにもいかず、まるで自分たちも子分になったようにそろそろと後をつけて歩いた。

一見ずいぶん間抜けに見えるが、犬たちがここにこの時刻現れることは情報により予告されていた。

バスカヴィルがピクリと立ち止まり、探るように顔を巡らせたので警官たちは及び腰に後ずさった。

バスカヴィルは広い範囲で自分たちが包囲されているのに気づいた。

所要所に車で乗り付け、降り立ち、こちらに急速に迫ってきている。

ガルルルルル・・、バスカヴィルは静かにうなった。

犬たちだ。本来自分たちの仲間であるはずの犬が、人間に従い、人間を連れてこちらに向かってくる。

警察犬、及び動物愛護団体が呼びかけ集めた信頼の置ける訓練された犬たちだった。

人間たちの姑息な戦略にバスカヴィルは怒りの青い光を強くした。背後にわつと何百という青い炎が浮かんだ。

人間たちはわつと驚き、感嘆した。

ネオンきらめくビルの溪谷に、それはなんと幻想的な光景だった。

た。

しかし、

「ワオオーーーーーーン」

バスカヴィルが細長い体を反らして遠吠えを発すると、後ろに従う生身の犬たちがパツと散り、走り出した。犬たちは人の群れに駆け込み、力強いフットワークで慌てて惑う人間たちの脚をかくぐり、突然、飛び上がると、若者の一人に襲いかかった。

まったく予期せぬ攻撃に、野次馬を決め込んで騒動を楽しんでいた若者は、突然すぎて訳も分からずとつさに身を守り、その腕にガブリと噛みつかれてようやくすごい悲鳴を上げた。

一気にパニックが爆発した。人々は悲鳴を上げていつせいに走り出し、ぶつかり合い、壁に突き飛ばされ、転び、踏みつけられた。お巡りさんは落ち着いてくださいと方向を指示するが、誰も聞かない。

逃げまどう群衆の中、あちらでもこちらでも、犬に襲われた者が悲鳴を上げて暴れ回った。パニックは膨れ上がる一方だった。

最初に噛みつかれた若者は衣服をぼろぼろに噛み千切られ、なす術なく地面に頭を抱えて固まったところを、間近に「ガウガルルル」と物凄い鼻息でうなられ、無抵抗なところを執拗に鋭い爪で引っ搔かれた。

彼は自分が空き缶を投げつけた野良犬のことを思い出していた。

2度3度と投げつけて、笑ってやったつけ。

バスカヴィルに従う犬たちは恐ろしく鼻が利いた。その者に虐められた犬が放った怯えた汗の臭いを、それが既に時間をおいた過去だろうと、決して見逃さずに嗅ぎ取った。

警棒を振り回すお巡りさんが駆けつけて、ようやく犬は若者から離れた。しかしすぐに次のターゲットに向かう。自身鼻が利くだけでなく、同胞の鬼火たちが、ここにもいるぞ、とその頭上で教えている。

犬は、その人間に襲いかかった。

お巡りさんに助け起こされた若者は、顔面を蒼白に、ブルブル震えるばかりだった。

人間の側からも防衛部隊が出動してきた。

プロテクターをまとい、強化プラスチックのシールドと長い警棒を携えた機動警官隊だ。

隊員は人々を守りつつ建物の中に誘導していく。

襲われている人の所へ駆けつけ、犬を追い払った。しかし、すると、

青い鬼火たちが機動隊員たちを襲った。

鬼火は全身を包み込み、シールドを立てようが警棒を振り回そうがまったく甲斐なく、低温で蒸し、呼吸を奪った。

鬼火に襲われ気絶する隊員が続出した。

そして。

街中に散った犬たちは、それぞれ鬼火を率い、所期の目的であった深夜営業のペットショップの襲撃を開始した。

陳列棚の犬猫たちが興奮して大騒ぎする中、店員店主たちは必死で入り口にバリケードを築いたが、犬たちは物凄い勢いで突進し、前足でガラスを突き破り、バリケードを突き飛ばして店内に侵入した。

店主たちは悲鳴を上げて裏口から逃れようとしたが、なだれ込んできた鬼火たちに巻かれ、悲鳴を上げることも出来ずもがき苦しんだ。

リーダーの犬は歯茎を見せてうなり、最後のとどめを刺すのを待っている。

パニックはあちらこちらへ拡散して、それぞれに恐怖の悲鳴を上げさせている。

情勢はバスカヴィル軍団の一方的な優位に進んでいる。

広がるパニックの中央で、將軍バスカヴィルは堂々たる巨体で仁王立ちしている。

10 狼

周囲から包囲を詰めてきた警察犬たちとそのパートナーの人間たちが、ようやくそれぞれの敵と遭遇した。

訓練された犬たちは人間の命令に従い人間を襲う犬たちに襲いかかった。

動員された犬はいずれも屈強な大型犬中型犬たちだった。軍団の犬たちと取っ組み合い、牙を剥きだした口で牽制し合い、隙あらばと殴り合った。

熾烈を極める犬同士の鬭いの一方、鬼火たちは人間に襲いかかるうとしたが、どうしたわけか直前で針にでも触れたように引き返した。遠巻きにしながら近づけない。人間はこの隙にと倒れた人を助け上げた。鬼火が巻いている人も、救助の人間が近づくと鬼火たちは恐れて離れた。

激しく続く犬たちの鬭い。

「大丈夫ですか？」

と救助員がけが人に声をかけていると、

巨大な影がのしかかるように迫ってきて、ハッと気づく人間の頭を殴り飛ばした。人間はひとたまりもなく気絶した。

バスカヴィルだった。

「ガウウッ、ガウッ」

バスカヴィルは犬たちに怒りの咆哮を浴びせた。手下の犬はビクツと身を引き、

ウー・・・と牙を剥く人間の犬も、

「ガルルルルルル」

巨大にして怒りに充ちたバスカヴィルに睨み付けられて、闘争心を吹き飛ばされ、クンクン、と服従の意思を表した。

バスカヴィルは身を翻し、次の戦場に向かった。

紅倉は、登場は、まだか！？

一方芙蓉は、

それから遡ること朝の7時から、

埼玉県秩父は両見山から両神山に至る尾根伝いの山道をひたすら歩いていった。

ここは霊峰両神山は御獄（みたけ）神社に参る古い参道で、修験者が修行に使っていた、一般参拝者にはあまりに過酷な道である。

一日がかりと教えられたが、まさにその通りだった。距離も長い、巨大な石の固まりである山道は、足に厳しく、疲労が激しい。危険な岩場も多い。

登る芙蓉は、まさに修験者だった。

御獄神社に神の助力を頼みに行く。

命がけの道だが、これには、先生の命もかかっている。

早朝出かける前にあの寝ぼすけの先生がぱっちり目の開いた真剣な顔でくれぐれも気を付けてと送り出してくれた。

今夜、強敵と勝負を決するという。

先生は犬が大の苦手なのだ。それでなくても相手は、強い。

神の力が要るとここに芙蓉を送り出したのだ。それ無しでは勝てないと。

紅倉が頼る神。

祭られる神もそうだが、特にここを頼ったのは、その御眷属・

一族というかご家来衆というか、それが、

山犬様だからだ。

この山犬様をなんとか御味方にお迎えできないかと、わざわざこうして険しい修験道を登ってきているのだ。

芙蓉は山登りは素人だ。天性の運動神経を頼りにやってきたが、思った以上に平地を歩くのとは感覚が違う。昼を回っても目指す道のりの半分も越せず、これは拙いぞと、本気で焦った。目指す両神

山は更に険しく厳しいのだ。

そうして焦って歩いていると、どこからか、2匹の柴犬が現れた。芙蓉の前と後ろに立ち、まるで道案内してくれているようだ。前の一頭が正しい足の置き場を示し、後ろの一頭が芙蓉が誤った位置に足を運ぼうとすると「ワンツ」と吠えて警告してくれた。

芙蓉は二匹を犬神様の使いと信じ、心と体を励まして先を急いだ。しかし日没に間に合わず、最後は鎖を掴んで登る危険な岩場をヘッドランプを頼りに登らなければならなかった。

ようやく登り切り、神社の鳥居をくぐったのはもう8時になろうという頃だった。

道案内してくれた犬たちはいつの間にも消えていた。

社を守る狛犬がやけにスマートだった。イヌより狐に近い。

時間がない。芙蓉は三礼して柏手を打ち、祭られる神に祈った。

どうかお力をお貸してください。

どうか先生をお助けください。

どうか荒ぶる犬たちの魂をお鎮めください。

芙蓉は背後に気配を感じ、そつと後ろを振り返った。

8匹の白い狼が整列していた。

鋭い目つき、牙は、狼の物だが、よく見知っているオオカミの姿とはだいぶ違う。横が狭く、すっきりしている。顔つきもハイエナなんかに近い感じた。オオカミほどの洗練された攻撃性は感じず、むしろ家庭的な平和な感じがする。

山犬。つまり絶滅した二ホンオオカミの姿なのだろう。

夜の闇に浮かび上がる真っ白な姿はこの世のものではない。

『女の足でよくここまで登ってきたな』

頭の中に直接聞こえる聞こえ方に芙蓉は慣れている。

「皆さんがこの山に住む山犬様たちですか？」

『いかにもそうである』

いかにも偉そうに言う言い方も、なんとなく愛嬌がある。

「お願いです、どうかわたくしの願いを聞いてください」

『そなたの願いは承知しておる。下界の騒ぎも承知しておったが放つておいた。しかし頼られたからには力を貸さねばなるまい。助けてやるぞ』

「ありがとうございます」

芙蓉はそれとつても分かりやすい返事にほっとして感謝した。

『それではその者に案内してもらおう』

芙蓉の肩から小さな白い光の玉が浮き上がった。

八匹の白狼たちも二周りほど大きい白い光の玉に変じると、小さな玉の後について空を飛んでいった。遠くの宝石のような光を目指して。

11 狼犬対ウルフハンター

戦場を駆け回っていたバスカヴィルは仲間の異変にピクリと反応し、急ぎ、元いた辺りに駆け戻った。

につくきペットショップを襲撃していた仲間が一人、殺された。相手は得体の知れない・自分と同じ妖犬だ。それにしても何が起こったのか？時を少し遡る。

バスカヴィル配下の犬が鬼火を引き連れてペットショップに侵入した。

そこには2人の店員と3人の客がいた。客のうち一人は奈緒の父親だった。

犬は牙を剥き、ワンツ、と鬼火たちに命じた。

鬼火たちはさーっと店員と客に寄り、その体を炎に巻いた。

人間たちは息が出来ず苦しんで転げ回った。

犬は怒りと憎しみの目でじつとその様を見ていた。

ところが突然、外から吹いてきた風で人間たちに取り付いていた鬼火たちが飛ばされてしまった。

犬が何事かと振り返ると、

紅倉美姫がロデムを従えて立っていた。

犬はじつと睨むと、

手近な人間、奈緒の父親に襲いかかり、その首にかじりついた。

父親はぎゃあと悲鳴を上げたが、犬はあごを噛み締めてはいない。父親は両肘で背を支え、必死で首を持ちこたえた。犬はかぶりついたまま、じつと紅倉を見た。

ロデムが出ようとするのを止めて紅倉が言った。

「人質ってことね。頭がいいけど、わたし、あんまりその人たちを助ける気ないのよね」

父親はそんなあと痛みに顔を歪ませながら泣きべそをかいた。

「店員さん」

へたり込んで震えている店員たちに言った。

「死にたくなければケースの中のペットたちを全て解放しなさい。
ま、それで助かるかどうかは、日頃の彼らへの態度次第でしょうけれどねえー」

天井には青い鬼火がうようようこめいている。店員たちは必死で次々ケースの扉を開いていった。

次々飛び出してきた子犬たちは、

キャンキャン、と、店員たちに吠えかかり、紅倉に向かって吠えた。

うつと紅倉は青くなって後ずさった。

犬は勝利を確信した。ところが、

キャンキャンと、仲間の犬たちに吠えたて、店員や紅倉を守ろうとする子犬たちもいた。

驚く犬に、どうする？と紅倉は顔で訊いた。

犬は、くわえた人間の首を噛み切ろうとし、それを察したロデムが駆け込み躍りかかり、防戦に転じた犬と組み合ったが、これは見るからにロデムの方が強かった。力押しで上を向かせ、ガブリ、とロデムが犬の喉に食らいついた。犬は目を剥き、はあはあと口をあえがせたが、じきに動かなくなった。

「ロデム」

と手で制しながら紅倉が店内に入ってきた。

駆けるバスカヴィルを遮る者はいない。

駆け戻ったバスカヴィルは、店を前に立ち止まり、じつと様子を窺った。

パン、パン、パン。

上からピストルの弾が浴びせられた。

大きな的に3発全弾命中したが、バスカヴィルはまるで痛がりも

せず上を見た。

ビルの2階の窓から見下ろしている警官たちは信じられない思いであたふたした。

ガルルル、とバスカヴィルが鼻の上にしわを寄せると、鬼火が集まってきた警官たちを襲おうとした。

警官たちはひいっと逃げたが、鬼火たちは何故かビルの中に入らず、そこでさーっと横に分かれて逃げた。

バスカヴィルは1階の店舗入り口を見た。

わらわらわらと子犬たちが駆けだし、バスカヴィルの後ろに立ち、ワンワンキャンキャン吠え立てた。

黒い大型犬が仲間の首をくわえて出てきて、地面に置いた。仲間はずつたりして、死んでいる。

バスカヴィルは青く光る目で黒犬をじっと睨んだ。

黒犬、ロデムは赤い目で睨み返した。

2者の距離は4メートルほど。大型のシベリアンハスキーであるロデムだが、頭の高さはバスカヴィルの腹までしかない。

上と下から睨み合う青と赤の瞳。

バスカヴィルがふいと視線を外してロデムの背後を見た。

雪の妖精のような格好をした紅倉が店から現れた。その目はロデムの主人らしく更に赤かった。

「初めまして、バスカヴィル。紅倉美姫と言います。こちらはわたしのお友だちのロデム。どう？なかなか男前でしょう？」

紅倉は軽く微笑みかけたが、もちろんバスカヴィルは答えない。

紅倉も期待していたわけではなく、すぐに冷ややかな顔に戻った。

「わたしはあなたの支持者なの。出来たらあなたとロデムを闘わせようなことはしたくないわ。ここまであなたの圧倒的勝利よ？」

大勝利の内にここで引き上げるといふ戦略もあるんじゃない？」

バスカヴィルは紅倉を睨んで歯を剥き出した。その恐ろしい顔に紅倉は我知らず足がすくみ、さーっと頭が冷たくなった。やはり犬に対しては体が怯えてしまう。

ロテムが主人を守るように肩を揺すって前に出た。紅倉はすくみ上がった体を動かせず、固まった顎で囁くようにロテムに言った。

「もう少し頑張つて。今応援が向かつてるから」

「ワンツツ」

バスカヴィルが一声吠えた。その声はビルにびりびり反響し、紅倉は堪らず肩をすくめて首を縮めた。

「ウウウー」

ロテムもバスカヴィルを睨んでうなった。

「ガルルルルル」

「ウウウー」

「ガウツ」

「・・・」

ついに二頭はお互い突進した。

飛びかかるロテムを、バスカヴィルは下から前足で殴り上げた。

空中で体勢を直し着地したロテムを、バスカヴィルはぐるりと体の向きを変え後足で回し蹴りのように蹴った。肩で受けたロテムはさまざまの破壊力にふつとばされ、ガードレールに激突した。すかさずバスカヴィルは牙を剥いて襲いかかってきた。ロテムは必死に足をかいてバスカヴィルの噛みつきを防いだ。バスカヴィルはまた前足でロテムを横殴りにし、横に延びたロテムの首を噛みつこうと襲いかかった。間一髪よけたロテムは首を振ってうなり声を上げ、姿勢を低く、威嚇しつつ噛みつく隙を窺った。牙を剥いたバスカヴィルはロテムの威嚇を物ともせずまたも振り上げた巨大な前足でロテムの頭を踏んづけた。地面に押しつけられたロテムは顎をすりつけながらなんとか逃げ出したが、バスカヴィルは躍りかかって全体重を載せたパンチでロテムの横腹を突き飛ばした。苦しみながら必死で逃げるロテム。怒りながらもバスカヴィルは冷静にロテムを攻撃し、休む間を与えようとはしない。

見ている紅倉ははらし通しだった。

早く早くと思っていると、ようやく西の空から白く強く光る玉た

ちが飛んできた。

小さな玉と八つの大きな玉たちは激闘する二頭の上をクルクル巡り、三つの大玉が小さな玉と合体し、眩しく輝きを増した玉は、バスカヴィルの足に転がされるロデムの体に入り込んだ。

ロデムがぶるんと力強く上半身を振り、バスカヴィルを退けた。

ロデムはしっかりと立ち上がり、四肢に力をみなぎらせてバスカヴィルを睨み付けた。

その全身から白い光が滲み出している。

その姿を見て、上空にいた残り五つの玉はそれぞれに散っていった。

バスカヴィルはひるまず、上背を生かした前足の攻撃を再び行った。

しかし叩き伏せようと繰り出された足蹴を、ロデムはがっちりくわえ、太い首を振り、足を踏ん張り、バスカヴィルの巨体を投げ倒した。尚も口を放さず、右に左に激しく振り回し、深く牙を食い込ませた。牙から強い光があふれ出し、バスカヴィルは悲鳴を上げた。瞬間的に怒り狂ったバスカヴィルは怒りのままにロデムの頭を殴りつけた。強烈な一撃に目から星が飛び、ロデムは口を開けてしまった。

すぐまた次の一撃が降ってくるかと思いきや、バスカヴィルは後ろに飛び下がり、起き上がったロデムと激しく睨み合った。

車道に車の数はすっかり減っている。ビルの中に避難した人々は今は本気で怖そうに二頭の大型犬の死闘を見つめている。ペットシヨップの子犬たちも鳴き声を上げずじっと見つめている。

人を襲っていた鬼火たちは、御獄神社から飛んできた白い玉に追いやられ、空にとどまり、近くの者は群れのボスの決闘の行方を見守っていた。

ロデムと睨み合うバスカヴィルは、

「ガルルルルルル……」

うなり声を激しくし、歯を剥き出し、目を剥き出し、目の光を強

くしていくと、全身からも青い光を發し、全身を青い光に変えていった。

魔犬、幽霊犬、バスカヴィルが、その正体を現した。

爛々と燃え上がる瞳は、その炎を大きくはみ出させ、地獄から舞い戻った憤怒を露わにした。

対するロデムもじつとバスカヴィルを睨み据え、鬼神の武威を放った。

睨み合う両者は、

ついに、

「ガウウッ」

「オウッ」

真っ正面からぶつかり合った。

12 死闘の明日

鼻先をぶっつけ合い、お互いにガリツと噛みついた。

ガウガウガウ、と激しく声を出しながら、お互い素早く力強く鋭い歯で攻撃し合った。

肩を揺らし、足を踏ん張り、ポジションを探り合い、首の軸を常に相手にまっすぐ向け、休むことなく攻撃を繰り返した。何度も何度も噛みつかれ、ロデムの鼻先は深い傷にえぐれた。バスカヴィルの方も青い炎が煙のように噴出した。生身の体だったなら激しく血を噴き出しているのだろう。

紅倉は右手を何度も胸の前に持つてきて、そのたびぎゅっと握つて下に下ろした。ロデムとの闘いに集中している今なら、霊気の弾を放つてバスカヴィルを倒すことが出来る。しかし、これは犬同士の決闘なのだ、人間の自分が卑怯な手でボスをやっつけても、群れの鬼火たちは納得しないだろう。

子犬たちも厳粛な顔で見守っている。ビルや止めた車の中から見つめる人々も真剣な眼差しで、中には悲壮な表情をし、中には見られなくて泣いてる女性もいた。

ガウウ、ガウ。

全力でぶつかり合い、死を懸けて闘う白と青の光を発する二頭は、実際の倍の大きさにも感じられた。

大都会のビルに囲まれて闘う獣たちは、怪獣のようでもあったし、キングコングのような悲哀も感じさせた。

もつといい、もうやめてくれと、多くの人が願っていた。しかし。

「ガウッ」

ついにバスカヴィルが長い大きな口でロデムの鼻と下顎をがっちり捕らえた。

バスカヴィルは上から体重を載せてギリギリとくわえたロデムの顔を下へ押しつぶしていった。

ロデムは目を剥き頬を力ませ、首に力を込めブルンブルンと振った。都会のネオンがロデムの黒い顔に反射した。おびただしく濡れているのだ。

「ガウウウウウウウウウウウウウウウ」

バスカヴィルがロデムを完全に地面に押しつけようとした。あきらめずグイグイッと首を振るロデムは、

顔をひねって下あごを脱出させ、顔を交差させてバスカヴィルの頬に噛みついた。

間近で右目同士を睨み合わせた。

ロデムが太い首で体を回転させ、バスカヴィルの首をねじ曲げてその背中に乗った。

バスカヴィルは振り払おうと暴れたが、ロデムは食らいつき、しがみつき、離れず、

暴れていたバスカヴィルは、

立ち尽くし、よろめくと、どおっと巨体を地面に倒れさせた。

ロデムは噛みついた口を放さない。

上下していたバスカヴィルの腹が、ゆっくり、ゆっくり、動かなくなった。

その上空に五つの白い玉が戻ってきた。

ロデムの体からも眩しい輝きが浮き上がり、一つの小さな玉と三つの大きな玉に分かれて、三つの玉は仲間に合流した。

紅倉はロデムに歩み寄り、しゃがむと、濡れた頭を撫でた。

「ロデム。お疲れさま。もういいわよ」

ロデムは赤い目をギョロツとさせ、バスカヴィルを見て、ようやくゆっくりと、太い糸を引きながら、口を放した。

ロデムが起き上がって離れると、バスカヴィルの体が青く燃え上がり、薄汚れた、骨と皮だけの体になった。

「バスカヴィル。あなたはすごい犬だったわ。あなたは、神様なんかにならないで、もう一度この世に生まれ変わってきなさい。そうしたら、今度はロデムのお友だちになってちょうだいね」

紅倉はバスカヴィルの黒い瞳にまぶたを被せてやった。

子犬たちが集まってきてバスカヴィルの体をくくん匂いを嗅ぎ、
ぺろぺろ舐めだした。

鬼火たちは白い八つの玉の周りに集まってきて、八つの玉は、鬼
火たちを引き連れて西の空に飛んでいった。

白い毛の長い子犬が、ペットショップから外を窺う父親に「ワン
ワン」と吠えた。

父親は子犬を見て、

「リボンか？」

とつぶやいた。

子犬はワンワン嬉しそうに元気に飛び跳ね、すたすたと、都会の
複雑な陰の中に消えていった。

父親が気づくと、紅倉が物凄く恐い横目で睨んでいた。

「行きましよう、ロデム」

紅倉とロデムもまた、戻ってきた都会の雑踏の中に消えていった。

数日経って。

紅倉は雨の日も風の日も毎日ロデムといつしよに散歩に出る。

あの私生活全般にめんどくさがり屋で消極的な紅倉が、ロデムと
の散歩だけは毎日欠かさない。

ロデムの顔は傷だらけで、出会ったときから鼻が利かない。

紅倉にとっては気兼ねのいらないちょうどいい友人だ。

紅倉は相変わらず犬に出会々とワンワンキャンキャン吠えられる。
どうやらロデムも他の犬から吠えられているらしい。

でもロデムは紅倉と違って怯まない。あんまりうるさい奴にはジ
ロリと一睨みしてやる。ロデムより強い犬なんて、この世にいるわ
けない。

紅倉は上機嫌で歩きながら、ふと、ロデムに言ってやった。

「ねえロデム。もしかしてあなたたち犬って、この世で一番馬鹿で、

お人好しの動物なんじゃない？」

紅倉はロテムが大好きだ。

ロテムもきつと、この人間の女の友人を気に入っているだろう、多分。

終わり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0055j/>

猛犬バスカヴィル

2010年10月8日15時28分発行